

特42

844

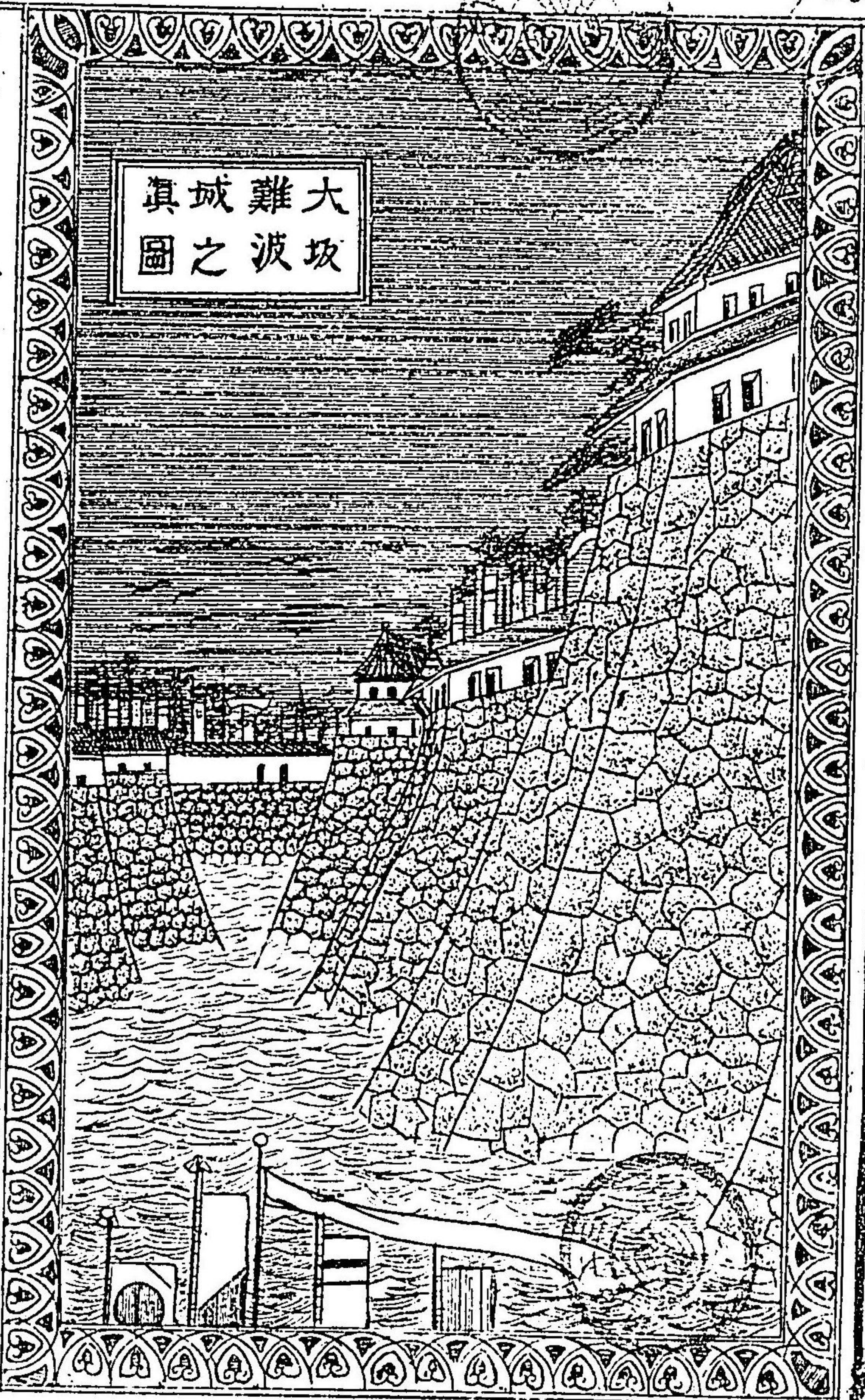
真田三代記全



1857/23

大難城真
坂波之圖

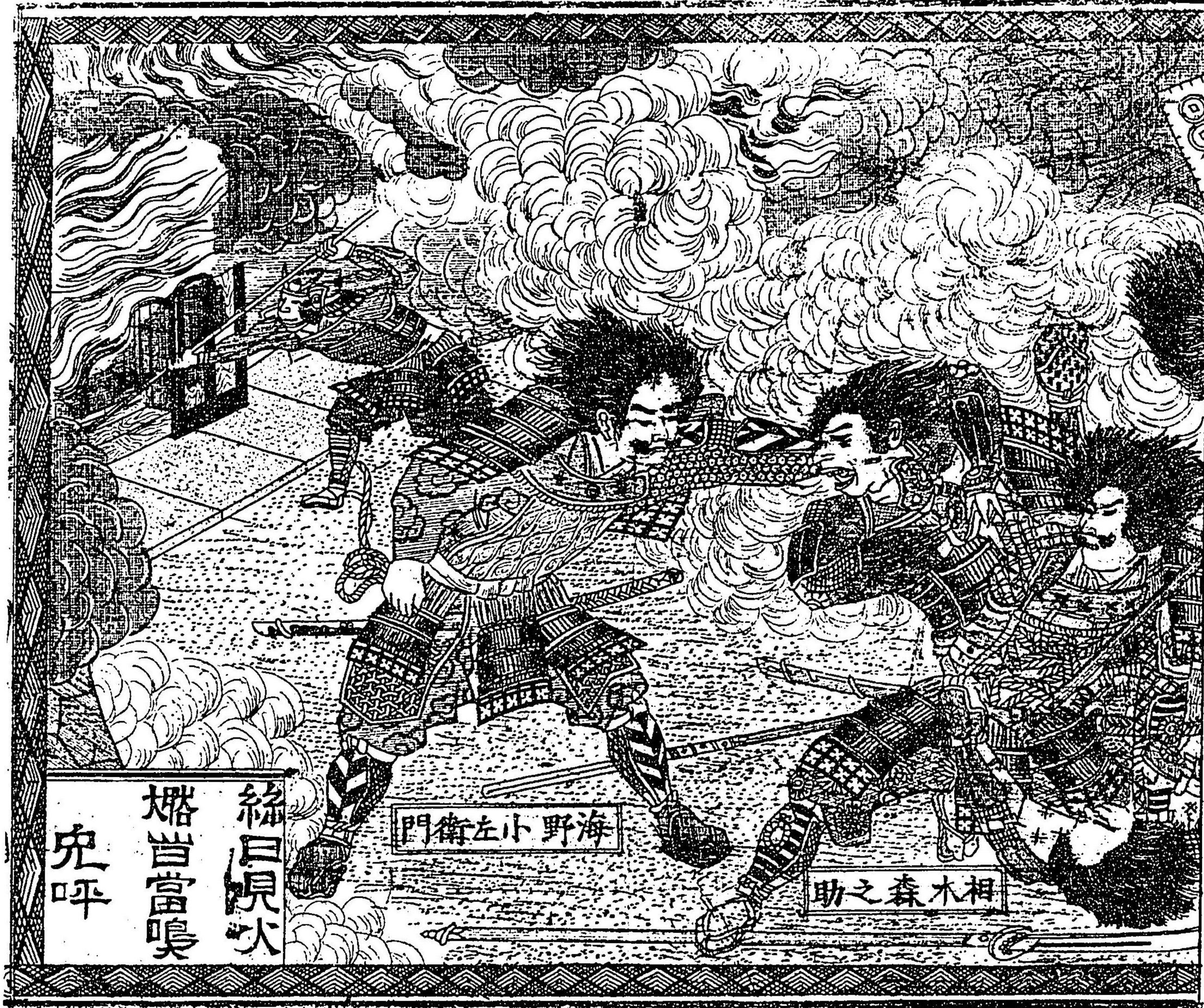
真
田







真田彈正忠幸隆



兜呼

燃當嘆

綿巨恨火

海野小左衛門

相木森之助

真田

忠幸隆清真田幸隆
 和源氏の庶流海野小太郎
 幸氏の後裔にして武田清光
 幸氏が英勇を知て客分とな
 して置たり幸氏が子孫武田
 家又任へ真田と改め累代の長
 臣なり未孫真田次郎三郎幸
 隆の長男なり英才聰明は能く
 兵を率ひ戦功多し頃永正十六年
 三月下旬加賀美田郎の城攻の時
 幸隆は後陣は在り見物して居りし
 が家光穴山小左工門と呼んで申るる
 ハ今日の日合戦見ん兵工が勇力天
 晴と思ふなり方候を以て見を我家来よとまん有るる
 煙の中より一人の壯士大長刀を打振大音揚げ遠く燃止る
 者音もさし城方は於て鬼神とされし相木森



相木森之助

之助ハ我事なりと名乗り力
 一ハ八騎道切落り幸隆見
 此者を生捕らんと自ら鎧を
 相木森と打交す真田殿とて
 相手を取て不足しし昔
 戦ハ真田殿は進行を相木
 追りしと追りし腹黒し返せ
 相手が馬の前足を踏まれハ
 谷々手取足取カめんと思
 共大旗が折重なりて終に
 大は敵ひ早々我陣へ引く
 失われハ先城中又火を消
 して勝鯨波を揚夫より加賀美が一家櫻井兵部



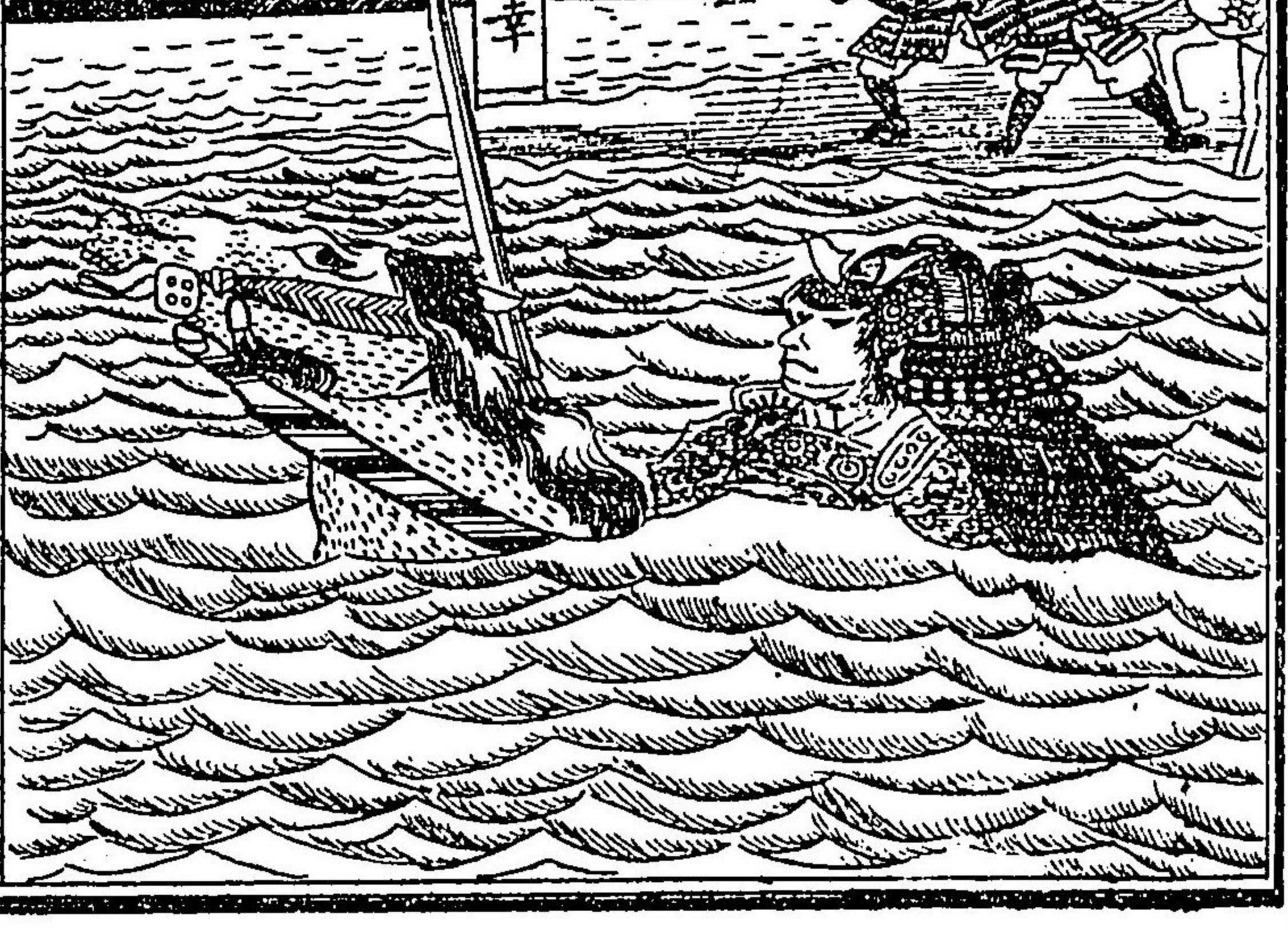
家康公

戦ふは如しと百五十騎を安中の東西に此岩を構
 (大筒二挺を左右の所へ後陣百五十騎松井
 田も亦百五十騎軽井沢に備へり) 徳川勢は是
 を見て小勢を侮り「もはや蹴らんと先陣
 本陣を京手勢をくつて進撃す其勢甚しき
 成れんと思ふ」打柄時分「好と左右の大筒一同
 打放せば天地も崩る」と思ふ有様は森が先手二
 百人黒烟の内血煙り立て倒れ掛る器械の世
 には「め徳川勢は腰をかく誰一人も進む者なく
 本陣として逃行す」此由具言す秀忠公は信幸
 を召され問給ふ「其祖父幸隆工夫の大砲を候共再
 度用立かこし心易く思召す言上先手勢是れ
 と得て一度安中を攻落せし幸村屋々神出鬼没の妙計は徳川
 勢敗軍しるるを信幸が郎等は麓尾次郎助大に怒り衆は油
 憤戦す為真田方死傷大方なるを依田兵エとて狙ひ
 打の名人なるら三分こ狙ひま」打
 出玉は恤むべし鷹尾が腹打技



新將軍秀忠

れ馬より落る所を依田が走り
 寄首を取らんとせしは鷲尾を
 ぞ揉合しが深手のまきま堪(ま)つ
 ひは首を奪取られん上田勢は十分
 勝利を得て勝を作り引揚るま
 徳川勢は安中若小勢なるを見て揉討敗
 人と大久保一陣は進み戦ひけれバ既此告
 おちんとする有様なり此由秀忠公聞王ひ大に悦
 び本陣の兵を操出し追々先手は組込されバ本
 陣ハ三千許り午時兵根の用度最中地中は怪しき物
 奇きへられバ忠秀公怪し馬を跨り陣を出入ハ
 近習のめんく引つが立退とせし折柄百千の雷
 雷落るが如く一時は地雷火発したり秀忠公の危き命
 助り王心此時六文銭の旗風と頭れ真田幸村是ま在り秀忠
 逃る事なれと五百余人突て掛れバ秀忠公を大に驚さ五
 ひ近習の面々をハ一大事と取て返し奮激しけれバ公ハ幸
 して高岸差て落伸び玉ふ上田勢ハ勝鯨波を揚ぐ安中
 こを引揚たり初も大御所は八京都二條より南都の方



真田昌幸

進ませしむる此由幸村が催促注進及々々幸村大は悦び忍の者霧隠鹿右衛門と云者一敵を伺はせしは神保
 長三郎一柳監物分都左京の三将と云幸村早くも奇策を運し無紋の旗は三家の紋を自ら画き由利浅香増
 田兄弟青山の五人ハ分都の旗海野別府木近兄弟四人ハ神保の旗明石寛三好清海はハ一柳の旗を持と
 各々三百人づつ間道を超て進む又木村崎薄田の三人ハ大筒を持と向ハハ開東方斯る事ハ露知さ明日ハ
 大坂へ出張し巡見せんと勇氣を勵し酒宴を有して有る所ハ分都の旗を押し由利も神保が陣は向ハ大
 ん揚げて先君の大名を忘れ開東は従ハ大罪人其首波と呼せられ神保長三郎大は駭き扱ハ分都一柳ハ
 さしと狼狽騒ぐ分都一柳の方も同様の謀まりり同士討と成り斯る所ハ大筒打掛れハ大御所大は驚き
 まひ急ぎ遁んと西屋竹腰大久保安藤小栗近藤等五百余騎奈良を指て打立れしハ分都の旗指する由利の家
 唐殿何とて敵は後を見せ給ふ返一王と叫びる故西屋近藤竹腰取て返し戦ハ神保一柳の旗指する海野
 三好も打て出無二無三ハ切掛り火花を散りて攻立る故皆必死ハ防ぎ戦ハ中大御所も只一騎漸ハ切抜王ハ
 息を吐て休らハ王ハ後ちより誰や追来る大御所怪ハ大久保成瀬りと問給ふハ彼武者笑て吾我ハ信州
 上田の城主真田幸村也君を待事已ハ久シク御首申請と叫りけれハ大御所大は驚き玉ひ跡開きて逃
 び一王ハ幸村ハ遁ハハと追駈行ぎ返一王と叫ハ近付ハ鎧取延て突掛しが御運強りりハ鞍山を
 突事三四度なりハ駿足の名馬なれ共一所ハ躍り力と疑ハ給ふも理りなり此時前ハ一文余の溝ありけれ
 ハささむちも共諸鎧を王ハ難なく溝を飛越ハ遁れ給ふ幸村口惜と續て飛しハ溝中ハ浴入りけれハ幸村
 ハ一と跳りこハ馬を溝中より引揚る間ハ大御所ハ逃延ハ王ハ夜も曉ぬれハ一人の男門を開き居れハ大
 御所我をりくハ吳と後日褒美を与ふハこの王ハ甲斐ハ承諾あれ桶の内ハぞ入れ奉りぬ此首後
 ハ悔屋勝左衛門とて江戸甲奉行となら実ハあふハ事ともなりハ斯て慶長十九年開東城ハ二十余万の兵を



真田幸村

以て大
 阪城攻
 掛
 田幸村
 川津粥を長柄の把柄はてあびて又
 と鶏卵を投して数千人を驚かせ或ハ
 釣瓶の策を以て千五百人を一度ハ押潰
 しなどとしハ奇手の諸軍其奇計ハ恐れ
 舌を巻てぞ退さる開東城を攻あぐハ十一
 段は備へ番手攻は徹さんと企てハ幸村
 天倉より是を見て敵番手攻をもちと思
 り仕様有べとて大助治幸を従へ登城し
 て秀頼公の御前ハ至り申上るハ開東城
 此度ハ番手攻を致さんと見へハ十二段の
 内七段ハ破るハれども五段ハ至り討
 死と存候ハ御暇を參上仕り候

涙を流し申上られハ秀頼公ハ枝柱と頼つゝ真田が討死と聞玉ひ大に驚き何と為さざる様やあとの四
 辺を見廻し玉ふ時小幡勅兵エ申くるハ何とて軍師ハ左様の事を給ふぢ残り五段ハ後勝木村の兩将は
 引受なハ必ま心易のん左ハ計ひ給ハぢやと云然ハ黒門口ハ大事の場なり誰れ是を守るべきと押返せ
 ハ小幡怒て某不肖なが之を替ふんと云ふ幸村横手を打其許々諸有上ハ何の恐れハ候とて歎ひ出九は帝
 言ふ兩人不審顔にて関東の間者ハ大事の持口を預け玉ふハ何事ぞと問はれと彼奴ハ今又浅香が連來
 一と云ふ間もなく小幡を高手は縛め庭前引居れば幸村小幡は向ひ其方何故は関東は内通と云ふ小
 幡答て曰ふ様某少しも覚まら証據を頭をばと云ふも果に小幡より関東へ密使遣りし小幡善兵エを見
 されハ小幡尚も陳せんと眼を怒し汝昨夜不埒の事あり追出せし却て我を誤する不届者と叱りし時幸村
 急は心付し跡は去れハ貴殿ハ偽りなき神文されとて縛をとりし小幡見事ハ神文を認め差出
 幸村つく見て者共小幡を生捕と下知の下より又高手小手は縛められ其時幸村ハ彼密書と神文を引合
 せ小幡は見せ発乎と白眼此上は偽るやと云はれて勤兵エ赤面なし差うつ向て居りし小幡を獄に下し
 慶長十九年十二月一日徳川勢大阪城は攻め掛る大御所ハ茶臼山本陣を構へ新將軍ハ住吉本陣を構へ給ふ
 然る幸村ハ抜穴より茶臼山は打向ひ伴大助治幸は謀計を言合め住吉なる秀忠公の御陣は向はせ給ふ
 山近傍の火の手は驚き援兵の人数を遣はされ住吉に最手薄は有つ所ハ突然鯨波の声天地を震ひ茶臼
 者ぞと見せしむる早敵勢渦巻来る大音は我ハ真田行村の子大助治幸は候ハ幸村已ハ大御所の御首受候
 新將軍も御首渡さるべしと呼り叫び獅子の如くは煮回し攻戦ハ新將軍ハ潜は本陣の後に出給ふ時口付心得
 御馬を参らざるは屈從僅五六人付添乗出し玉ふ大助是を見て返し給へと呼掛るも本多中務水野日向大助を支



眞田幸村

戦ふ大助も馳抜て將軍は追付まが
 甲項駿足の名馬なれ共一処は躍る心地し
 策鎧を合せ追立玉ふ大助今ハ止り兼夜中
 なか骨白星を目的は倒の強弓能申
 撃め放つ大光將軍の御運強かりん御
 後の松村治郎兵衛と羽ぶる
 て射技は木村を三言とて死せり
 安勝も取て返し戦ふ大助ハ將軍を討渡さる上ハ強
 て戦を討まが人数をまとめて安々々城中引退さる関東
 此軍は打死の者五千人入り大坂方三百許りと聞ける扱大
 坂城中ハ真田千房臥龍を欺く程の智略を以て十分
 足らぬ軍兵は度々大軍を敗り鬼惱なれば大御所
 始め新將軍も晝夜御心を痛めまひ迎も力戦して勝
 利覚束なく一度和議を整へ時節を待て町人の
 後勝庄三郎を呼出し奇密を申合の城中遣し
 くれハ淀君聞れ先幸村を召て尋玉ふ幸村申
 採此程の百軍は手取り和議の士と存候
 其心は御途あれ和議ハ御心は任せ玉ふ

申々淀君御討面有り、庄三郎一種の献上物山の如く積で申様常光院様阿茶の局御對顔被成度思召、淀君早速御承和有、兩女を召れ御和睦の御咄有れ、淀君は徳川兵を治めて痛陣なれば此方より追討ハ致さば、淀君は、兩女夫をハ詮なし彼の三ヶ条の内一ツを御開入有度と言時淀君ハ大は怒り謀るべし天下を其終差置違約の罪を此方より問ふべきは却て當城へ兵を向る其罪許すべからざるまひたり、幸村ハ奇計を以て屢々關東地方を破りか思ひ掛るも蜂須賀ハ關東一味方し、利き(撤多々崎)又伯耆カ淵を衆取、水要吉松安宅を奪ひ此の如く不利故に秀頼公始め淀君も眉をひそむる計なり、斯る處、真田幸村治幸登城有るも、秀頼公も淀君も悦び給ふ其他古老七組も出仕有り幸村口を開き此程中の敗北何事ぞと四辺を見廻し、若く切て逃ぐれば百老始め敗北の諸將ハ面首なくまうつ向て黙り、皆幸村言を正し、勝敗ハ軍の習ひ必き下手にて申されず百敗も然りの一勝は如き各此上ハ何ぞ御思案候と問われれば、淀君ハ固く籠城して關東より福島黒田の攻益を待たし如きこの給は幸村言やう某一計ももなき候明後日ハ城中より軍を登し茶臼山に攻掛り心を家康の首を見せし、何の苦も申されば諸將之方を得て能く計ひ給りれと口云、其心中ハ呆れ果て居るも、真田父子ハ悠然然と其依持場を降りたる、後藤ハ心得ぬ幸村口上哉と思ひ去來出丸趣りんと支度の処長曾我部木村米りしハ三人連立出丸に至り幸村ハ面合し不審の段を尋ぬるは今夜討掛る也と聞て三人仰天ノ敵の備々成ハ思ひ候と口を揃へて申されば、其一人は夜討致さず家康を打取ハ再び生きて各逢き仕損ハ如何もして逆れり又諸君は談笑を三將の諫も聞入き酒宴をなし快然として三將を別を告げ大助は後事を示其身ハ健兵の武具を陣笠を冠り村正の大太刀を横へ昌幸秘藏有し箭筒筒として火繩の鐵砲を携へ松屋早を南へ出行ハ本多の下人ハ行違是居意と二方は切腹中より割付て打刺を奪ひ是を諸君の固めを斯き茶臼山の本陣に忍入しを知る人更は無り、極大御所ハ諸將と共に御酒宴有しが俄に固守の給ふ幸村其足音を聞清しカわけを出給へハ成瀬御手木と上る所を狙ひ、部下の下より打出き鉄砲のひびき共は、大御所ハ左の耳元を打たれ、アト云て倒

命危從の同、大驚き、魂を奪はれ、大天事大御所を抱き内へ入り、兵村の素を指上られ、大御所漸く人は返り王ひ初も不思議の珍事哉、千記の中幸村立返りたり、初も真田父子屢々妙計を顯せ、淀君大野兄弟の如き、信玄の浮塵は日月の光りも薄く成行く事、豊臣家運の衰へ、心懸る人、關東方まで大御所の給は、此程ハ大阪方の諸將計死するハ全く淀君大野が専斷より出るもの、然れ、真田が打死も近かる、先斥候を出して城兵を動かさ、伺ハせ、敵兵近辺を見せ、申上る去ハ自ら見積るべし、王ひも、諸將謀れ共闘、危難ハ戰場の習ひなり、言放て進行せざる幸村ハ關東方平野へ軍を進ん、近有と諸將を亀井の教の中は、依き、又大助ハ五百目の大筒を授け、増田根津を差添へ、同く要地は伏せ、其外手配り調ひ、大久保忠教ハ井伊藤堂は出奔の事を談し、我身ハ御共ハ馳付んと乗行、此時大御所ハ静々と馬を歩行せ、至る長曾我部早引退した、是を我心は馳めんと謀計も、ふん、と、ハ、く、イ、と、亀井村を南へ平野の方を見積らんと、立王ひ、天下を握り、王ひ、洪福のち、なり、王ひ、故、を、召、れ、御、馬、を、引、き、是、を、嘶、き、足、を、踏、き、大、御、所、は、御、心、地、働、き、思、召、王、ひ、は、依、急、ち、下、馬、一、王、ひ、や、否、や、大、助、が、打、放、つ、大、筒、は、鞍、を、打、く、馬、ハ、急、ち、伏、倒、れ、近、百、の、者、五、八、人、に、成、て、失、ま、り、夫、と、云、間、穴、山、に、始、め、伏、兵、は、教、の、中、より、起り、立ち、敵、は、火、を、付、れ、折、筋、烈、風、依、ち、り、龜、井、村、ハ、面、を、燃、え、上、り、津、下、き、有、様、は、安、藤、治、右、門、早、く、も、君、を、乗、り、一、旗、本、勢、ハ、此、で、大、く、討、れ、る、大、久、保、忠、教、ら、ぞ、る、後、の、本、林、まで、逃、行、り、後、より、大、城、勢、難、波、を、作、て、逐、討、つ、は、火、火、火、増、々、さ、り、な、り、旗、本、勢、ハ、此、で、大、く、討、れ、る、大、久、保、忠、教、ハ、鉄、砲、の、音、火、の、手、を、見、ち、り、藤、堂、井、伊、ハ、軍、勢、を、出、さ、し、其、身、ハ、鎧、取、て、打、つ、出、敵、を、左、右、は、突、ち、り、大、御、所、ハ、其、隙、に、遁、れ、王、ひ、所、は、淺、見、五、五、五、追、ひ、來、り、た、る、徒、士、の、者、水、野、五、郎、左、門、急、場、の、義、御、免、有、れ、と、御、陣、羽、織、を、給、つ、踏、み、止、り、散、々、と、切、ま、り、終、つ、討、死、を、大、御、所、ハ、辛、じ、て、危、き、所、を、逃、れ、王、ひ、斯、る、所、は、總、身、朱、を、塗、る、一、符、茶、の、紋、の、陣、羽、織、ハ、陣、笠、深、く、冠、り、源、家、康、討、死、の、覚、悟、と、呼、ぶ、者、有、大、御、所、不、審、は、見、王、ひ、は、余、人、は、有、り、大、久、保、忠、教、を、り、鳴、呼、び、心、を、な、く、と、云、給、つ、遁、れ、王、ひ、を、運、の、程、を、目、出、度、々、れ、猶、此、後、は、真、田、幸、村、骨、を、粉、は、し、身、を、碎、き、肝、膽、を、こ、り、て、働、け、り、猶、平、野、の、表、は、戦、ひ、ま、り、大、御、所、ハ、辛、じ、目、こ、と、參、り、せ、々、れ、共、免、角、内、より、叛、臣、起、り、秀、頼、公、の、叔、父、な、り、淺、井、周、防、守、も、恋、心、し、て、關、東、は、心、を、寄、り、淀、君、大、野、が、我、恨、み、有、各、各、

大將ハ追々打死を遂げぬれハ用
 して此城を以て開運思ひ
 寄ぎて決定し木村長官我部後藤
 の阿々共は秀頼公の御心まいす
 幸村源共赤心もちろし君を度
 薩丁の国まをり決りて開運
 を待しと申上られハ秀頼公も涙
 がとち有られハ夫ハ木村重成ハ
 後事を委託し夫ハ用意急成り
 真田幸村同大助を初として長官我部父子後藤又
 共其外真田の臣下とも百五十余人を召具し密り城
 中の抜穴より登田まで忍びあがり此城は薩州の家臣伊
 集原刑部と通し出兵隊より用意の船を召せられ夫ハ薩
 州へ向ちのび王ハ一時の人心を知らしめて城中ハ木
 村重成真田幸村とわけて示し合せしなれハ開東ハ秀頼
 びろんを覺り今日切腹せられハ速に開城段申送り置
 淀君を始ハ大の女子夫々自害をせり初木村ハ秀頼
 公の身物の具を看し見事切腹して城ハ開東へさ
 たり時なる哉太閤以降の盛運也此処に至りて止むも運
 のさめも是非あり

後藤基次



徳川家康公

明治三十三年二月十六日印刷
 全 十八日出版

大坂市南區長堀橋壹丁目
 百七十番屋敷平民
 印刷兼 井上市松
 發行者

